

## 第1章 「対話型アセスメント(略称「DLA」)」の概要

### 1. 「対話型アセスメント(「DLA」)」のねらい

- ・「DLA」は、基本的には、日常会話はできるが、教科学習に困難を感じている児童生徒を対象としています。
- ・子どもたちの言語能力を把握すると同時に、どのような学習支援が必要であるか、教科学習支援のあり方を検討するための「DLA」をめざしています。
- ・「DLA」によって、指導者は児童生徒が何をどのように学んでいるのかを知ることができます。また、学習支援のための指導計画の助けとなり、学習活動及び教材の選択について考える際のヒントを与えます。
- ・児童生徒の学びにとって意味のある指導計画を立てることによって、子どもたちの学びに対する興味関心、学習意欲を喚起し、学習動機を高めることが可能です。

### 2. 「DLA」の特徴

- ・「DLA」は、いわゆる従来型の紙筆テストや集団テストとは異なっています。
- ・それは、子どもたちの母語、年齢、入国年齢、滞在年数（四大要因）によって影響を受ける言語運用力や思考力、学びの方法等が多様であるために、これまでの画一的なテストでは、子どもたちの本来の力を引き出すには限界があるからです。
- ・「DLA」は、テストから得られる結果を序列化するためのものではなく、むしろ、テストの実施過程そのものを、学びの機会として捉えるところに特徴があります。
- ・さらに、一番早く伸びる会話力を使って、紙筆テストでは決して現れることのない、潜在的な力を引き出します。
- ・そのために、「DLA」の活用方法は「対話型」を基本とします。それは、指導者が子どもたちに向き合う大切な機会（対話重視）であると考えからです。
- ・指導者と子どもたちが一対一で向き合うことで、日頃の学習の成果を、そして今後の支援活動で必要となる学習内容や学習領域を絞り込んでいく上で必要な情報が得られるような構成をねらいとしています。
- ・厚い言葉の壁の中で教科学習言語能力を伸ばそうとしている外国人児童生徒は、個々の子どものレベルに適した評価者のちょっとした問いかけや語りかけ（誘い水のようなもの）によって、その力の片鱗を見せることがあります。
- ・ゆえに、「対話型」の「DLA」は、年齢相応の言語能力を持たない子どもの教科学習言語能力評価法として妥当性があると言えます。

### 3. 「DLA」を使用する際の基本的なステップ

- ・測定ツールを有効に使うには、次のステップを踏むことをお勧めします。
- ① 評価の目的を明確にする：「DLA」を使って、子どもたちのどのような側面、例えば、言語能力面であるのか、思考力などを必要とする認知面であるのか、具体的に知りたいことを明確にする。「DLA」から知りたい情報を確認する。
  - ② 評価ツールを選ぶ：「DLA」で提示されたいくつかの評価ツールから、目的に合ったものを選ぶ。
  - ③ 評価ツールを理解する：事前に評価ツールの実施方法をよく読み、進行方法を十分に理解しておく。
  - ④ 子どもたちの力を最大限発揮させる：「DLA」の実施にあたっては、「DLA」＜はじめの一步＞（詳細は後述）を通して、ラポール（共感できる信頼関係）を築き、持っている力を思う存分発揮できるよう配慮する。また、技能別テストが可能かどうかを判断する。

#### 4. 「DLA」が測定しようとしている言語能力

- ・「DLA」は、＜はじめの一步＞（「導入会話」と「語彙力チェック」）と、＜話す＞＜読む＞＜書く＞＜聴く＞の4つの言語技能から構成されています。
- ・「DLA」のそれぞれのテストは、おおむね以下に示すような言語能力の測定をねらいとしています。①②③については序章を参照してください。

テストと測定能力

測定能力 テスト	①CF (会話の流暢度)	②DLS (弁別的言語能力)	③ALP (教科学習 言語能力)
◆導入会話	○		
◆語彙力チェック		○	
●DLA 〈話す〉	○	○	○
●DLA 〈読む〉		○	○
●DLA 〈書く〉		○	○
●DLA 〈聴く〉			○

#### 5. 「DLA」の構成と内容

- ・「DLA」を活用するために、以下のものが用意されています。

##### ◇「実践ガイド」

- ・「実践ガイド」は、各技能測定の概要を説明し具体的な手順を詳述したものです。

##### ◇「評価キット」 (別冊資料および巻末資料)

- ・「DLA」実施の際に評価者が必要とするカード類、読みテキスト、作文用紙、映像DVD、キーワードのイラストなどが含まれます。以下に技能ごとに使用するキットの一覧を示します。

技能別評価キット一覧

テスト名	評価キット
◆＜はじめの一步＞ 「導入会話」	
◆＜はじめの一步＞ 「語彙力チェック」	「語彙カード」
●DLA 〈話す〉	「基礎カード」「タスクカード」 「認知カード」
●DLA 〈読む〉	「DLA 〈読む〉 レベル別テキスト」(7冊)
●DLA 〈書く〉	「作文用紙」 「作文課題」
●DLA 〈聴く〉	「聴解用映像」(DVD 1本) 「視覚補助教材 (キーワード)」

## ◇「診断シート」

- ・「診断シート」は各技能の測定結果を記入するものです。

## ◇「DLA 実施レポート」・「DLA 採点表＜全体評価＞」（実践編 第7章で詳述）

- ・「診断シート」で得られた結果をまとめて記入するものです。

## ◇「JSL 評価参照枠＜全体＞」

- ・「DLA」では、各技能別のテストの開発と共に、日本語の力の段階を6段階の「ステージ」に分け、総合的かつ多面的に記述した「JSL 評価参照枠」を作成しました。
- ・「JSL 評価参照枠＜全体＞」では、「在籍学級参加との関係」と「支援の段階」を6ステージで示しています。
- ・ステージ1～2は、日本語による意思の疎通がむずかしく、サバイバル日本語の段階です。在籍学級での学習はほぼ不可能で、手厚い指導が必要です。
- ・ステージ3は、単文の理解がむずかしく、発話にも誤用が多く見られるレベルです。クラス活動に部分的参加を始めつつ、個別的な指導をすることが必要です。
- ・ステージ4は、日常生活に必要な基本的な日本語がわかり、自らも発話ができる段階です。話し言葉を通したクラス活動にはある程度参加できるレベルです。しかし、授業を理解して学習するには読み書きにおいて困難が見られ、個別的な指導が必要です。
- ・ステージ5～6は、教科内容に関連した内容が理解できるようになり、授業にも興味をもって参加しようとするレベルです。読み書きにも抵抗感が少なく、自律的に学習しようとする態度が見られます。必要に応じて支援をしていくことが必要です。

## JSL評価参照枠＜全体＞

ステージ	学齢期の子どもの在籍学級参加との関係	支援の段階
6	教科内容と関連したトピックについて理解し、積極的に授業に参加できる	支援付き 自律学習 段階
5	教科内容と関連したトピックについて理解し、授業にある程度の支援を得て参加できる	
4	日常的なトピックについて理解し、学級活動にある程度参加できる	個別学習 支援段階
3	支援を得て、日常的なトピックについて理解し、学級活動にも部分的にある程度参加できる	
2	支援を得て、学校生活に必要な日本語の習得が進む	初期支援 段階
1	学校生活に必要な日本語の習得がはじまる	

## ◇「JSL 評価参照枠＜技能別＞」

- ・各技能別評価で得られた結果と、日常の授業態度やテストの結果などと合わせて、総合的に日本語能力の発達段階を評定し、今後の支援の必要度を判断するために「JSL評価参照枠＜技能別＞」を示しています。
- ・日本語や教科の学習が進むにつれて、子どもの言語能力や思考力も変化します。学習の節目でもある時期（学期末、学年末）に「DLA」を実施して、子どもの変化や変容、でき具合などを判定するために「JSL評価参照枠＜技能別＞」を活用してください。

## ◇「個人指導記録」（実践編 第7章で詳述）

- ・「DLA」の結果を記録します。

## 6. 「DLA」の進め方

- ・「DLA」は、「学びの力を伸ばすテスト」「学習支援に役立つテスト」をめざしているため、実施方法は「対話」を重視し、マンツーマン形式で行います。
- ・子ども一人あたりの所要時間は、45～50分以内で実施してください。したがって、実施においては、子どもが一人ずつ受けられるよう準備してください。
- ・ただし、子どもの状況によって必要な時間が異なるため、明記されている所要時間は大体の目安としてください。特に、「導入会話」やDLA〈話す〉は、対話の流れを崩さないように無駄を省いて、短時間で終わるようにする必要があります。
- ・一人あたりの所要時間の目安は、「はじめの一步」は5分程、「話す」は15分程、「読む」は30分程、「書く」は40分程、「聴く」は15～20分です。
- ・どのテストを実施するかは、実施者が決めます。子どもの日本語能力に応じて、適宜選択してください。

## &lt;留意点&gt;

- ・実施者は、児童生徒が理解しやすいように短文、単文で話すよう心がけます。
- ・実施者が質問する時は、「～ですか／ますか」のような「です／ます体」で質問します。
- ・実施者は、子どもが話している時、話をさえぎったり否定したりしないようにします。
- ・実施者は、子どもが日本語による発話や作文等で詰まっても、すぐに答えを与えることはせず、答えを誘導するように支援します。
- ・実施者は、子どもの力を最大限に引き出すために忍耐強く話したり書いたりするのを待ちます。
- ・質問が理解できないと思われる時は、言い回しを変更せずに、3回ぐらいまで繰り返します。

## 7. 「DLA」と日本語能力の判定方法

## 7-1. 包括的尺度と分析的尺度

- ・外国人児童生徒の日本語能力の判定においては、日頃の観察や指導を通しての反応からある程度推測したり、把握したりすることが可能です。しかし、指導者個々人の主観的な判断によることが多く、子どものレベルを具体的に示すとなると共通の尺度上で評価する必要があります。
- ・「DLA」では、子どものパフォーマンス（言語行動、言語運用能力）を評価の対象にしているため、パフォーマンスのレベルを判定するための評価尺度を参照します。一般的にパフォーマンスの判定には、以下の2つの評価尺度を使って判定する方法があります。

- ①包括的尺度：全体評価、総合的評価の際に用いられる尺度です。話す力や書く力は、内容を全体的に捉えて成功の度合いを判定することがあります。このような場合に包括的尺度が必要になります。なお、8頁で示した「JSL 評価参照枠＜全体＞」は、子どもの在籍学級への参加の関係や支援の段階を包括的尺度に基づいて明示したものです。
- ②分析的尺度：言語能力を支えている知識や能力を分析して、それらを評価対象項目として位置づけ、パフォーマンスのレベルごとにその特徴を記述したものです。評価の際には、項目ごとにパフォーマンスの特徴を分析しレベルを特定します。ただし、各項目のレベルが必ずしも一致するわけではありませんので、全体評価のように結果をまとめることはむずかしくなります。しかしながら、子どもの強い点や弱い点については比較が可能になるので、より細かく把握することが可能です。「JSL 評価参照枠＜技能別＞」はこの考え方をもとに作られています。

・「DLA」では、両尺度ともに6レベル、発達段階を意識して6ステージという名称に分けて記述しています。

### 7-2. 技能別の採点・評価

- ①技能別の採点では、技能別に用意された「診断シート」を使用し、パフォーマンスのレベルを採点・評価してください。
- ②採点欄は、3段階「5・3・1」で表示したものと「正・誤」「正答・無回答」（＜話す＞）で表示したものがあります。いずれも、必ず点数が明示され、合計点、平均点が計算できるようになっています。

### 7-3. ステージの判定

- ①ステージ判定には、「DLA」の結果として出てきた得点を平均値化します。
- ②「DLA」で得られた結果を「JSL 評価参照枠」のステージに反映させます。
- ③ステージの記述文を参照して、実際の子どもの能力と比べます。
- ④平均値から出された数値が該当ステージの記述内容と一致しない場合、記述内容を優先してステージを判定します。

・子どものステージの判定はやさしいものではありません。なぜならば、子どもの潜在的な能力を測定するためには、30分から40分程度では十分ではないからです。「DLA」を実施して得られた情報は、あくまでも限られたものであって、「JSL 評価参照枠＜技能別＞」と参照し、子どもの現段階でのステージを推測したり予測したりするものであると考えることが大切です。

・ステージ判定では、「DLA」の結果として出てきた得点とともに、日頃の子どもの学習成果を「JSL 評価参照枠＜技能別＞」の中で位置づけることも大切になります。

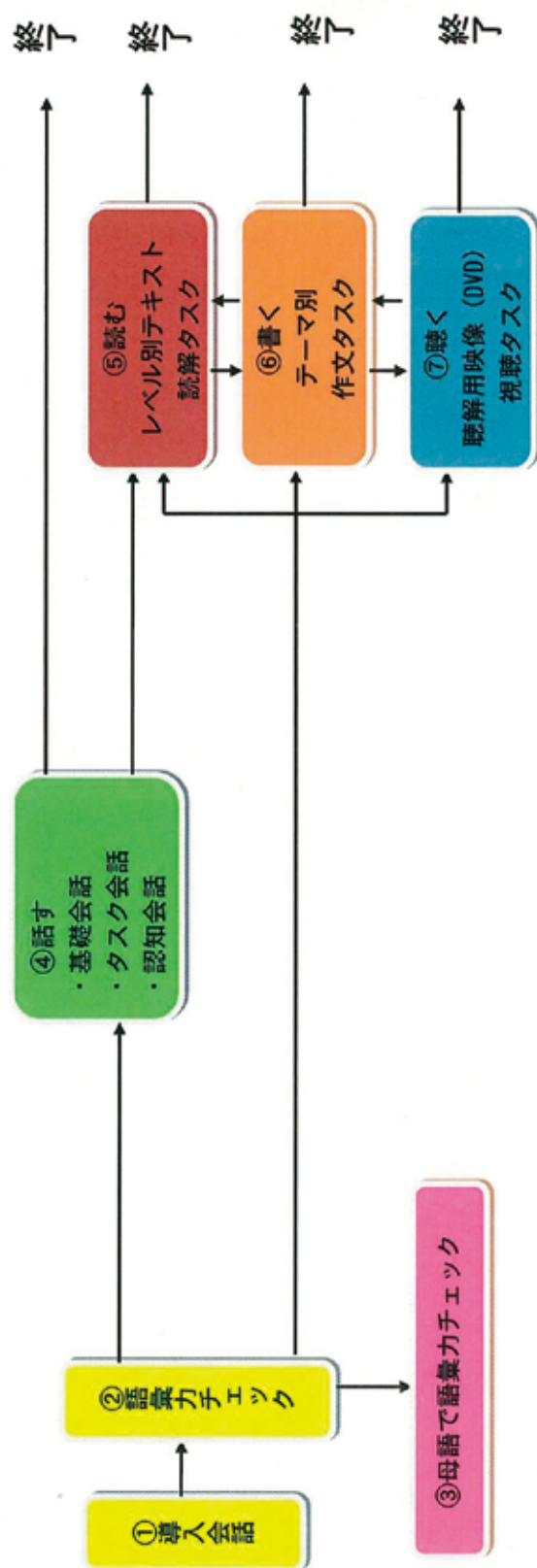
## 8. 「DLA」の流れ

- ・以上述べてきた「DLA」の構成と実施の流れを次ページに示します。
- ・観察により子どものステージが予測できない場合は、指導者あるいは実施者は、①「導入会話」②「語彙力チェック」によって子どものレベルを確認します。④＜話す＞に進むか、⑤＜読む＞⑥＜書く＞⑦＜聴く＞に進むか判断してください。文字がわかるレベルであると判断された場合は、④を省略しても構いません。⑤⑥⑦の実施の順序は、子どもの日本語力に応じて柔軟に対応してください。



## 観察による「JSL 評価参照枠」のステージ予測

ステージ予測に迷う場合に評価を実施：個々に応じて評価ツールを選択



## 評価・診断結果による「JSL 評価参照枠」のステージ確定

支援のあり方へのヒント

・1回の実施で全ての「DLA」を行うのは望ましくありません。数日に分けて実施することを心がけてください。なお、どのくらいの頻度で実施するかについてですが、指導や学習の成果を把握するために実施する場合は、半年に一度実施するのがよいでしょう。また、指導の在り方を検討するための情報を得るために実施する場合は、その都度実施することも可能です。

・所要時間は子どもによって、また、与える課題によっても異なりますが、以下に目安を示しておきますので、実施計画の参考にしてください。

DLA 〈はじめの一步〉	5分程度
DLA 〈話す〉	10～15分程度
DLA 〈読む〉	20～30分程度
DLA 〈書く〉	20～40分程度
DLA 〈聴く〉	15～20分程度

## 9. 「DLA」の評価における機能と精度

・「DLA」は、日本の学校で学んでいる外国人児童生徒の日本語能力を明らかにして、現在の子どもの実態を把握した上で、どのような指導や対応が必要かを知るための評価ツールです。

・「DLA」の評価の機能としては、「診断的評価」、「形成的評価」、そして「総括的評価」が挙げられます。

・「診断的評価」とは、編入学当初や日本語指導開始時における、子どもの日本語能力、母語力、入国年齢、滞日年数、生活経験の実態等を把握するために行う評価です。

・「形成的評価」とは、日本語指導や授業の開始後に子どもの学びやつまづきなどを把握するために実施するもので、得られた情報をもとに支援の在り方や支援の内容などについて検討を行います。

・「総括的評価」は、学期末や学年末に実施して、子どもの将来の見通しについての検討を行います。例えば、取り出し指導や入り込み指導の回数や期間などの検討です。

・「DLA」は上記の目的を達成するために、子どものパフォーマンスに注目しています。

・パフォーマンスに焦点をあてた評価ツールであるために、テスト理論で言われているテストの妥当性や信頼性については新たな測定法という観点から考察する必要があります。

・妥当性とは測定したい知識や能力を適切に測定しているかを問うもので、信頼性とは測定結果に一貫性があり測定の誤差が少なく安定していることを示す指標です。

・この点からみると、「DLA」は、日本語を使わなければならない状況を設定して、子どもの日本語力を最大限に発揮させられるよう構造化されているので、妥当性は高いといえます。

・一方、信頼性については、実施者の質問や応答の仕方によって、また、実施するための環境要因によって、子どもの反応が異なる場合があったり、実施者の採点や評価の仕方が主観的になる傾向もあったりして、結果における信頼性の確保はむずかしいことが挙げられます。

・信頼性を高めていくためには、実施者向けの訓練を充実させることが必要です。

・また「JSL評価参照枠」の中身についても、今後、検証を重ねながら、精度を高めていく必要があります。